修 士 論 文 要 旨

学籍番号 20GH203 第 号	氏 名
人文社会科学 専攻（コース：現代共生 ）	余婉瀅

論文題目

日本語格助詞における紛れやすい誤用例の分析
－中国人日本語学習者を対象に－

基本的に述語は文を支える中心的な要素であり、日本語格助詞は、述語の意味を補う働きを持つ。一方、中国語は、日本語の格助詞と同じ体系を持たないため、中国人日本語学習者は日本語を習得する過程で、類似している格助詞をしばしば誤って使用してしまい、意思疎通がうまくいかない場合が少なくない。中国の日本語教育現場で教師にとっても、格助詞に関する知識が重要となる場面が存在する。実際に学習者が混同しやすい助詞を明確するために教師に質問をよくしているが、「何のためにこの格助詞を使うのか」「この格助詞を使うべきで、他の格助詞を使えない理由は何か」というような質問に答えられる知識は不可欠となる。そのため、教師は学習者が混乱しやすいところを意識する必要がある。一つのわかりやすい方法としては、学習者の誤用を観察する誤用研究である。これまでも、中国語や他の言語とする母語とする話者で日本語を学習している人たちを対象に、格助詞の誤用についての研究が多くを行われてきたが、これらの研究は格助詞の誤用例の一部のみを考察してきた。そして、多くの研究は誤用の原因を分析することにとどまり、どのような紛れやすい誤用例をどのように区別できるのかという問いに対してはまだ十分な研究がなされていない。

したがって、本研究では、中国人日本語学習者が日本語格助詞を誤用している部分を明らかにするために、選択式テストと正誤判断テスト調査を行った。先行研究のようにデータから学習者の誤用の様々な原因を考察するだけではなく、学習者が使用される教科書および辞書などに書いてある解釈からどのように紛れやすい誤用例を使い分けるかを論じた。

調査の結果から、先行研究で扱われてきた誤用の他に、中国人日本語学習者に、「相手」を表す「に」と「と」の混用も顕著に多いことが分かった。そして、動作場所を表す「で」と移動経路を表す「を」の誤用、組織主体を表す「で」と動作主体を表す「が」の誤用が多くみられた。また、 「前・中・あと」＋「に」と「で」の誤用例からは、先行研究に指摘された「前・中・あと」＋にという規則性が見られなかった。それに対して、中国人日本語学習者が選択する傾向は前後の意味にかかわらず、教科書に挙げられた例文の構文「前＋に」「中＋で」「後＋で」をほぼそのまま選択している。

本研究により、次のような結論が得られた。a. 中国人日本語学習者が格助詞を選ぶとき、中国語の意味に基づいて行っている。中国語は日本語の格助詞と同じ体系を持たないため、中国語に区別がない場合、学習者がどの格助詞を選択するかに影響を与え、誤用が生じることが多い。b. 学習者の習得段階にかかわらず、教科書などの解釈による固定形式で使用される語を見つけたらそれに対応する格助詞を決めることが多い。

このように学習者による格助詞の習得の問題点が明らかになった。初級段階であっても、これから中級や上級へ向かっていく習得段階全体を念頭に置き、必要な文法項目を指導した上で、もう一歩踏み込んだ解説をつけて紹介することが必要である。本研究では、使役/受身表現における「が」「を」「に」の使い分け（第5節）、「相手」を表す「に」と「と」の使い分け（第6節）、固定形式（前/中/後）に関わる「に」と「で」の使い分け（第7節）について、それぞれ学習者に対する説明の仕方を提案した。日本語の格助詞の用法を正しく理解できるように、その格助詞の間の差異を考慮しながら教授法を工夫すれば習得効果が上がると考えられる。